

IAMAP コーナーを始めるにあたって

国際気象学大気物理学協会 (IAMAP) の第 6 回科学会議 (IAMAP-93) を 1993 年に日本で日本気象学会と日本学術会議の共催で開催することが、今年 3 月日本学術会議で認められ、IAMAP 開催に向けて本格的な準備がスタート致しました。また今年 8 月にウィーンで開催される IUGG 総会において、会議の概略が決められ

ます。

編集委員会では、会員の皆様に IAMAP-93 の準備状況やその他最新の情報をお知らせするために、「天気」誌上に IAMAP コーナーを設けることに致しました。

(「天気」編集委員会)

国際気象学大気物理学協会 (IAMAP) 第 6 回科学会議開催について*

浅井 富雄**・村上 勝人***

1993 年日本で IAMAP 総会が開催されることは既に御承知の通りですが、1991 年 3 月日本学術会議も第 6 回 IAMAP 総会を日本気象学会と共催することを決定しました。1991 年 8 月ウィーンで開かれる IUGG 総会の期間中に IAMAP-93 の骨格が組み立てられます。本格的な開催準備段階に入りました。今後、その進捗状況を本誌上に逐次報告することにしますが、今回はその最初でありますので、これまでの経過や計画の概要をまとめて述べることにします。尚、IAMAP については本誌「天気」第 37 巻第 6 号 (1990 年 6 月) に詳しく説明されていますのでそれを御覧ください。

1. 開催にいたる背景と経緯

我国の気象学研究は近年急速に活発化しつつあり、1970 年代の地球大気開発計画 (Global Atmospheric Research Programme, 略称 GARP) や、1980 年代の中層大気国際共同観測計画 (Middle Atmosphere Programme, 略称 MAP)、気候変動国際協同研究計画 (World Climate Research Programme, 略称 WCRP) 等の国際協同研究への参加を始め、我国研究者の国内外での活躍により国際的な評価も高まっている。

一方、地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、砂漠化等

の地球環境問題を契機にして、特に異常気象や気候変動の機構解明と予測等に関し、気象学研究の重要性が社会的にも一段と強く認識されてきている。また、日々の天気予報の精度向上およびよりきめの細かい局地短時間予報の科学的基礎の確立と実用化のための研究・開発は国連総会で決議された国際防災の十年 (International Decade for Natural Disaster Reduction, 略称 IDNDR) の活動に貢献するものであり、自然災害の防止・軽減、社会生活の向上に寄与するところが大きい。

IAMAP はこれら気象学・大気物理学の研究を進展させる最大の国際組織であり、日本での開催が国内外から強く希望されるようになった。

このような背景のもとで 1980 年代に入って日本気象学会理事会、日本学術会議気象学研究連絡委員会等の関係者の間で IAMAP 総会の日本誘致が検討され始めた。その後紆余曲折があったが最近数年間の動きをまとめると次のようになる。

1986~1987 年：気象学研究連絡委員会は公式・非公式会合を重ね、IAMAP 第 6 回総会 (1993) の誘致について検討した。誘致することで意見がまとめられたが、主体となる日本気象学会での検討結果を待って最終決定をすることとした。

1987 年~1988 年：日本気象学会常任理事会は誘致する方向で検討していたが、一方、日本気象学会評議員会でも日本へ誘致する努力を促された。

1989 年 5 月 24 日、日本気象学会理事会および翌 5 月 25 日、同総会において誘致することが承認された。この日

* On the Sixth Scientific Assembly of the International Association of Meteorology and Atmospheric Physics (IAMAP).

** Tomio Asai, 東京大学海洋研究所.

*** Masato Murakami, 気象研究所.